

私の3・4年生向け授業「日本語作文技術」では、例年、「技大生にすすめる一冊の本」という作文を学生に課している。400字詰め原稿用紙1枚半以上2枚以内で書く、図書・雑誌の推薦文である。課題の主旨は、もちろん、授業で教えた作文技法の習得を評価することにあるのだが、それとは別に、今回はいったいどんな本を推薦してくるだろうと、毎年興味津々で作文を読んでいる。

ここでは、「技大生がすすめる一冊の本」と題して、昨年度（2008年度）1、2学期に学生が推薦してきた主に小説を皆さんに紹介したい。併せて、推薦文が私の印象に残ったノンフィクション・エッセイも何冊か紹介しよう。

参考までに、昨年度の作文提出者は全部で199名であった。そのうち小説をとりあげた学生は40名あまりだからそれほど多くない。それでも、実にバラエティに富んだ本が推薦されてくる。その一端もお伝えできると思う。

全体を次の7項目に分ける。各項目の最初には、そこで取り上げる本を紹介順に列挙した（単行本刊行年月を示し、後に文庫化されたものには\*を付す）。皆さんは、まずは関心のあるところだけを見てくれたらよい。

- (1)いま流行の作家・作品、(2)現代作家、(3)SF、ミステリー、
- (4)文学史上の作家、(5)少年少女向け文学、(6)ライトノベル、ノベライズ、
- (7)ノンフィクション・エッセイ

#### (1)いま流行の作家・作品（12タイトル・1シリーズ）

小説でも常に多く取り上げられるのが、いま流行の作家・作品である。

東野圭吾『聖女の救済』（08.10）、『流星の絆』（08.3）、『ある閉ざされた雪の山荘で』（92.3、\*）、「探偵ガリレオ」シリーズ（第一作は『探偵ガリレオ』（98.5、\*））、三浦しをん『風が強く吹いている』（06.9）、桜庭一樹『赤朽葉家の伝説』（06.12）、伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』（07.11）、『グラスホッパー』（04.7、\*）、貴志祐介『新世界より』（08.1）、恩田陸『光の帝国』（97.10、\*）、市川拓司『いま、会いにゆきます』（03.3、\*）、中野独人『電車男』（04.10、\*）、竹内真『カレーライフ』（01.3、\*）

---

## 東野圭吾『聖女の救済』、「探偵ガリレオ」シリーズ

※「探偵ガリレオ」の連作はドラマ化（07年）・映画化（08年「容疑者Xの献身」直木賞（05年下半期）受賞作）され、福山雅治、柴咲コウなど人気俳優が起用された。東野圭吾は工学部電気工学科出身のもとエンジニアだから、作品世界には技大生になじみやすいところがあるのかもしれない。

（この※は若林のコメント。以下が学生の推薦文の要約・摘記。以下同様に記載していく。）

この連作の特徴は「犯人が科学技術を駆使して殺人を実行する」、「警察と一緒に物理学の教授がトリックを暴く」の2点。だから、科学技術の面白さや怖さを知ることができる。また、犯人である科学者や技術者の人生における苦悩や挫折、彼らを追い詰めた侮辱や差別などは自分達の将来に身近なことかもしれない。『聖女の救済』はこのシリーズの新作。天才物理学者湯川教授が今回は「虚数解」という不思議な真相を推理。物語の巧みな展開とともに読者もその推理を楽しめる。

### 『流星の絆』

小学生の時に両親を何者かに殺された三兄妹がその殺害犯に復讐する物語。今は詐欺で生計を立てている兄妹がある男に結婚詐欺を仕掛けようとした。その父親が、両親が殺されたとき店の裏口から出できた男と同一人物だった。詐欺ではなく復讐へ、その物語は「息もつかせぬ展開」で、「読めば読む程犯人がわからなくな」り、最後は「驚きの真相」。

### 『ある閉ざされた雪の山荘で』

役者になるという夢を持った人達がある山荘に閉じこもり、殺人事件の芝居をする。ところが、芝居をするうちに本当に殺人事件が起こってしまう。命を守るために芝居を降りるか、夢を叶えるために芝居を続けるか。「あくまで夢を追う姿」を見倣いたい。

---

※近年の直木賞作家では、ほかに桜庭一樹（07年下半年期）、三浦しをん（06年上半年期）の作品があがった。

### 三浦しをん『風が強く吹いている』

※直木賞受賞第一作。推薦文には、作品世界が自分の経験と重なる時、人はより深くフィクションを味わうことができるということがよく表れていた。

竹青荘に住む寛政大学の学生が箱根駅伝を目指すスポーツ小説。「風を切って走る陸上競技の躍動感やアスリートの微妙な心の変化を繊細、かつ魅力的に表現している。」長距離選手に対する一番の褒め言葉は「強い」、その言葉のように「心身ともに強くなっていく彼ら10人のアスリートの姿は読んでいて気持ちが良かった。」「物語の終盤である箱根駅伝においては、仲間のために一秒でも早く襷をつなぎたいという思いと共に、仲間を信頼し、誇りに思うまでの晴れやかな気持ちが良く伝わってきた。」「私は中学から陸上を始め、長距離選手として駅伝には何度か出場したことがある。その度に、個人種目でありながらチームワークが求められる駅伝の魅力を感じたが、本書でも同様に興奮と感動を覚えた。」

### 桜庭一樹『赤朽葉家の伝説』

第60回日本推理作家協会賞受賞作品。高度経済成長から現代に至る時代を背景にした、鳥取の旧家に生きる三代の女性の物語。優秀なエンターテインメントとしての側面ともに文学的側面も持ち合わせており、彩り豊かな文章による情景描写、時代の変遷と共に移りゆく人物の心象を丁寧に描いている。

### 伊坂幸太郎『ゴールデンランバー』

※この作者の人気も高い。本作は2008年本屋大賞を受賞。

ハリウッド映画を思わせるエンターテインメントで、内容は、ある事件の犯人の逃亡劇。小説の面白さを教えてくれ、読書の楽しさを知ることができる。

---

### 『グラスホッパー』

「押し屋」と呼ばれる殺し屋をめぐり、三人の男たちの運命が交錯していくフィクション。「登場する人物一人一人の個性が際立っており、活字離れしがちな技大生でも飽きずに読み進められる」。

※考えさせられる作品として推薦されたのが次作。

### 貴志祐介『新世界より』

上下二冊で千頁を超える長編作品。超能力を持った人間が現われてから千年後の世界。物語の舞台となる町では、倫理委員会、教育委員会が子供達を管理している。子供達には知らされていないが、子供達に人権はなく、大人が不用や危険とされた者を間引いている。しかし、これは超能力の暴走や殺戮者を出さないための処置であり、子供達には可能な限り安全かつストレスのない環境が与えられている。主人公はこの事実を知って苦悩する。「管理社会を単純に否定・肯定するのではなく、そのどちらでもない姿を示している。」また、物語には、道具を新しく作り出せるほどの高い知能を持つバケネズミという生物が出てくる。人間に供物を差し出しすことで自治を認められているが、超能力を持たず、反抗したりすれば簡単に殺される立場にある。「彼らを見る人間の目を通して、読者は人間が繰り返してきた支配者と奴隷の姿を実感することができる。」「管理社会」や「支配者と奴隷」といった「既存のテーマを新しい視点から見ることができ、新しい発見」が得られる。

### 恩田陸『光の帝国』

※すでにいくつもの文学賞を受賞している実力派でもある。今回学生があげた作品は連続短編集で、01年にNHKでドラマ化された。

一話ごとに喜びや悲しみなど色々な感動があり、終わりがあがる、それでいて一話ごとの繋がりもある。そして、「最終話の大きな感動。」

---

※話題となった小説の映画化、ドラマ化の勢いが近年は著しい（アニメ化、コミック化というのも出てきている。「メディアミックス」と言われる）。以下の二作もそうだ。

### 市川拓司『いま、会いにゆきます』

妻を亡くした夫と障害を持ったその息子が、生前の約束通り雨の季節に帰ってきた妻と過ごした六週間の軌跡を描いた作品。「この本には人を想い合う気持ちがあふれている。」「主人公達の様に人を想い合えたらどれほど幸せか、願わずにはいられない。」「この本には愛する人を失った二人の悲しみが漂っている。」「涙なくして読めない。」

### 中野独人『電車男』

※「小説」の範疇には入らないかもしれないが、ここでとりあげよう。

自信も勇気もないオタク青年。ある事件をきっかけにある女性と知り合い、自分を変える決意をする。はじめは電話で会話することもままならなかったが、他の人達の応援と、自分自身を磨く努力により、自信を得る。そして食事、デートと段階を踏んでゆき、最終的にその女性に告白をし、その結果彼女ができる。ありがちなサクセスストーリーだが、主人公のリアルタイムな心境が生々しく書かれ、その「苦悩と焦り、それを乗り越えることによる成長」、また「主人公を応援する人達の心の温かさ」が伝わってくる。加えて、「オタクな現代人の実態も知ることができる」。

※こんなものもある。

### 竹内真『カレーライフ』

カレーを通じて成長し合う若者達を描いた作品で、原稿用紙1300枚に及ぶ長編。カレーに始まりカレーに終わるカレー尽くしの本で、読むと「必ずカレーが食べ

---

たくなる」。カレーのために国内や海外を飛び回っている作品なので、実際に旅行した気分が味わえる。「この本がきっかけで私は本を読むようになった。」

## (2)現代作家（7タイトル）

現代の実力派作家の作品も推薦図書に並ぶ。

小川洋子『博士の愛した数式』（03.8、\*）、村上龍『半島を出よ』（05.3、\*）、山崎豊子『大地の子』（91.14、\*）、帚木蓬生『三たびの海峡』（92.4、\*）、吉村昭『光る壁画』（81.5、\*）、阿刀田高『コーヒー党奇談』（01.8、\*）、星新一『夜のかくれんぼ』（\*）

### 小川洋子『博士の愛した数式』

交通事故による脳の損傷で記憶が80分しか持続しなくなってしまった元数学者「博士」と、家政婦である「私」、その息子「ルート」の心のふれあいを描いた作品。数学の奥深さや楽しさを再発見できる。物語の中では、素数を始め、「完全数」・「友愛数」など、数の美しい規則性が語られる。博士は、その時気づいたことを数学と結びつけてしまうのだ。たとえば、「私」の誕生日2月20日の220と、博士の学生時代の論文が学長賞をとった時にもらった時計のシリアルナンバー284という数字が友愛数であるとさらっと言い、実際に一緒に計算して「私」に理解させる。その極めつけが「博士の愛した数式」である「オイラーの公式（ $e^{i\pi} + 1 = 0$ ）」。eもiもπも無理数にも関わらず、1を足すだけでゼロになるという美しさを博士は愛した。「オイラーの公式は機械創造工学課程ではたびたび使う数式だが、注意して数式を見なければその美しさには気づかない。だがこの本はその美しさに気づかせてくれる。もちろんオイラーの公式だけではない。この本を読めば、数学の教科書が美術の教科書にも見えてくるだろう。」数学に対して嫌なイメージを持っている読者やあまり知らない読者でも、一つの物語を読みつつ楽しく数学と向き合うことができる。

---

※次は私たちが生きている現代社会とその歴史に取り組む三作。

### 村上龍『半島を出よ』

近未来の福岡市が主舞台。「福岡ドームを占拠し九州を独立国にしようとする北朝鮮のテロリスト集団と、米国に見放され経済的にボロボロになり、テロリスト集団に対して弱腰な日本政府と、そんな日本政府の対策に憤った『イシハラグループ』と呼ばれる外れもの集団などが、綿密なストーリーの中で絡み合う作品。」「北朝鮮のテロリスト集団は、初めての福岡に当惑したり、日本では当たり前となっている」様々なことを知らず、読者が「それを面白がりながら北朝鮮の現実について知る構成となっている。我々日本との違いが多く、とても考えさせられる。」また、「日本は世界から孤立し、」国が傾きかけており、「税金がはね上がっている。日本政府の対策の遅さも皮肉まじりで面白く書かれて」いて、日本の「政治・経済の脆弱性について考えさせられる。」それだけではない。『『イシハラグループ』には様々な集団から外れた者がいる。現在の日本でオタクと分類される者からヤンキーと分類される者たちまで様々な人々が互いを傷付けながら共に成長し、北朝鮮のテロリスト集団に立ち向かうまでになる」。そこには「彼らなりのやり方」があり、「彼らの生き様は、非常に考えさせられる。」

### 山崎豊子『大地の子』

中国残留孤児の半生を描いた物語。主人公がソ連軍の攻撃を受けて満州から逃げる場面、日本人であるため、文化大革命のとき皆に吊上げられ労働改造所に送り込まれる場面など、主人公の姿とともに激動の中国の様子を知ることができる。物語の後半では、日中共同プロジェクトとして中国に最新の製鉄所を造ることになり、主人公も携わる。その中で、日本と中国の技術者が対立する。互いの「文化の違いから、日中共同で仕事をするのは容易ではない。将来技術者になる技大生には読んで参考にしてもらいたい。」

---

### 帚木蓬生『三たびの海峡』

この作品は、韓国人を主人公として、ノンフィクションではないが、日韓史を重ね合わせて描く。主人公は、日本と韓国を隔てる海峡を三度渡る。一度目は戦時下の強制連行、二度目は日本女性との祖国への旅、三度目は受けた暴力と辱めの復讐のため。数多くの理不尽とやり場のない怒り、酷い仕打ちを受け、人権すら踏みにじられても、母国の誇りを失わない登場人物達には涙を禁じ得なかった。心にも何かを訴えてくる。感情を揺さぶるストーリー。

※技術者の人間像を描き出す作品の人气も根強い。

### 吉村昭『光る壁画』

これは、日本において世界で初めて胃カメラが発明されるまでを描いた物語。研究室に配属されたばかりの研究員が、医者である宇治の「胃の中を実際に覗いてみたい」という強い思いをきっかけに全く知識の無い生体の分野に取り掛かり試行錯誤を繰り返していく。発明までの道のりには失敗と挫折の繰り返しがあった。それでもあきらめずに原因を追及し改良していく。また、成功までの過程で様々なスペシャリストと達と携わり、協力しあっていく。カメラの重要部分であるランプ部の開発では今までつながりの無かったライフ電球という会社に依頼。常識的に考えると到底無理と思える要求にもライフ電球は真摯に取り組み続け、設計段階から装置として完成に至るまで何度も改良を加え続けた。研究は決して一人の力や考えだけで成すことが出来ず、共に協力し合っていく姿勢が大切だと再確認することができる。技術者としてのあるべき姿、研究開発のあり方を学べる。

※もちろん、小説の面白さは作品の長短に関わらない。

### 阿刀田高『コーヒー党奇談』

「ミステリー風の雰囲気の中で、自然や人の心を瑞々しく描く短編小説集」で

---

「全十二話からなる。」この短編集は「出会いというものの感動を思い出させてくれる」。それだけでなく、舞台がバラエティーに富んでいる。表題作はアムステルダム、第二話「霧を見た男」は北海道の摩周湖、第三話「橋のたもと」は新潟の万代橋。各物語はそれぞれ完全に独立していて、「まるで旅をしているような解放感を与えてくれ、読者を飽きさせない。」

### 星新一『夜のかくれんぼ』

※星新一（1926～1997）のショートショートはもっと短い。没後10年を記念して、NHKがアニメやドラマなどに仕立て、1回3編の10分番組として放映を始めている。

28作が収められていて、実に様々な物語がある。たとえば、「はじめての例」とある一人の老人が悪魔を呼び出し、「3つの願いを叶える代わりに悪魔に魂を渡す」という契約をする。ところが、最後に、三番目の願いを放棄した老人は悪魔に魂を奪われず、永遠に生き続けてしまう！ほかに、「こんな時代が」は理想の近未来にいかにもありそうな弊害、「黒い服の男」は悪徳医者の話。「想像力を働かせる楽しみ」がある。

### (3)SF、ミステリー（8タイトル2シリーズ）

このジャンルは、理工系学生のお手のものだろう。毎年何冊もあがってくる。

森博嗣『スカイ・クロラ』（01.6、\*）、田中芳樹『銀河英雄伝説』（82.11-87.11、\*）、有栖川有栖『双頭の悪魔』（92.2、\*）、高野和明『幽霊人命救助隊』（04.4、\*）、機本伸司『神様のパズル』（02.11、\*）、松岡圭祐「千里眼」シリーズ（第一作は99.6、\*）、三津田信三『厭魅（まじもの）の如き憑くもの』（06.2）、高田崇史『QED～ventus～御霊将門』（06.10）、ダン・ブラウン『ダ・ヴィンチ・コード』（04.5、\*）、アーサー・コナン・ドイル「探偵ホームズ」シリーズ（\*）

---

### 森博嗣『スカイ・クロラ』

※『すべてがFになる』(96.4、\*)でデビューした作家。10年ほど前には、何人も学生がこの作品を推薦していた。

戦争のない時代、そこに生きる人々が平和の実感を得るために「ショーとしての戦争」を求め、戦闘機による戦闘を繰り返す。戦闘機に乗るのはキルドレと呼ばれる永遠の命をもった子どもたち。彼らは撃ち墜とされるまで戦い続けている。この本は、その戦闘員として新たに配属された一人の少年の物語。その物語とともに、理工系の人間が興味をそそられる面白さとして、戦闘機の仕組みやその戦闘に関する専門的な知識が自然に得られることがある。「戦闘時には読みながら戦闘機が頭の中を飛び交っていた。」

### 田中芳樹『銀河英雄伝説』

※これもまた何度も推薦文でお目にかかった。80年代に刊行されたロングセラー。

「銀河を分けて存在する2つの国同士の戦いを壮大に描き、その戦いに参じるたくさんの人達の考えや行動を細かく書いた長編」。同盟国（民主主義国家）側の主人公が、命をかけた戦いにも関わらず、いかに味方と相手の命を失わず戦いを終わらせるかということを第一に考えて戦っていたり、腐敗しきった政治を見て、「もし民主主義国家の大多数が独裁主義を望むならば、その矛盾はどう解決するのか」と思ったりする場面がある。登場人物の考えや行動は考えさせられる。

### 有栖川有栖『双頭の悪魔』

ある大学のミステリー研究サークルのメンバーが事件に巻き込まれ、その真相を究明していく推理小説。事件編と解決編から構成されていて、謎解きに必要情報は全て挙げられ、物語の探偵役と全く対等な条件で謎解きに挑むことができる。一つの事件が解決したかと思えば、また新たな事件が起こり、最後の最後まで

---

で読者を飽きさせない。「特に、物語の真相の意外さには読者の誰もが驚愕することになるだろう。」「この小説ほど読書後に充実感を覚えるものはそうはない。」

### 高野和明『幽霊人命救助隊』

自殺した裕一という名の青年が三人の仲間の幽霊と共に地上に戻り、百人の自殺志願者の命を救うという物語。生真面目なサラリーマンがうつになり、会社内や家庭内で孤立して自殺を志願するようになる。独り暮らしの老人が、その寂しさと身体の老いから自殺を考えるようになる。そんな人達に、主人公達は時間をかけて救済法を考え出す。「自殺志願者の心理がどのように変化するのか」が、「その人物をとりまく人々の行動や心理も含めて」描かれている。彼らはどのようなことを考えて自殺を志願するに至ったのか、また、自分がそのような心理状態になった場合にどうすればよいか。「いざというときに自分を救うことができるようになる。」

### 機本伸司『神様のパズル』

二人の大学生が「宇宙は作ることができるのか？」という疑問の答えを探るSF。「宇宙が本当に無から生まれたのであれば、自分たちで作ることも可能なのではないか、この発想から実際にどうすれば作れるのか話が進んでいく。」ソフトウェア上でのシミュレーションや宇宙を構成する粒子の存在を加速器を用いて確かめるなど専門的な話も多く含まれている。だが、主人公の一人、留年寸前の学生の視点で描かれ、この学生が分かるように説明されるので、読者も理解できる。また、「ゼミでのディベートの場面では、複数の視点から宇宙とはなんであるかを議論しており、これも読者の理解を深めるのに役立つ。」「宇宙に対する疑問を抱き、登場人物達と共に考えることができる。」

### 松岡圭祐「千里眼」シリーズ

このシリーズは、臨床心理士で元航空自衛官の押美由紀を主人公としたミステリー・エンターテインメント作品で、25冊以上もの文庫本が発売されている。全体

---

的にSF的な味付けが施されながら、現実社会の問題を取り上げていて時事性もある。サイコサスペンシブな作品、スプラッタ・ホラー的なもの、社会派サスペンスの妙味とリアリティにあふれた、深みのある人間模様を描いた作品など、「一話ずつ趣向を変えて書かれているため、あきがこない。」

### 三津田信三『魘魅（まじもの）の如き憑くもの』

「昭和三十年代の因習に閉ざされた村を舞台に民俗ホラーと本格ミステリーが禍々しく結集した長編である。」複数の視点人物それぞれが体験した恐怖を読者に伝えるのだが、怪奇現象の描写が上手いのでとてつもない恐怖を覚える。また、「ラストの余韻が素晴らしく、読んでいる間はもちろんのこと、読み終えても、鳥肌が立っていた。」それとともに、霊や憑き物の仕業としか思えない怪異や死をどのように合理的に解釈し、解決するのか、「本格ミステリーとしても読み応えがある」。「ホラー小説が好きな人も、ミステリー小説が好きな人も最後の最後まで楽しめることは間違いないだろう。」

### 高田崇史『QED～ventus～御霊将門』

シリーズ番外編第三巻。「平将門に関する歴史や民話を時代背景をもとに読み解き、また、将門に関連して起きた事件と結びつけて解釈する推理小説だ。」例えば、将門がなぜ日本三大怨霊や日本三大悪党と呼ばれるに至ったか。また、将門が「瞎目（かため）明神」（『寛明事跡録』）、「目奇（かため）明神」（『将門純友東西軍軍記』）として祀られているという記録は何を意味しているのか。将門と古代タタラ製鉄、タタラ場を支配しようとする朝廷、そして朝廷に刃向かった将門。これらの結びつきが解明される。「教科書では書かれていないような歴史に触れることができる。」

※海外の人気作品が二つ。

---

## ダン・ブラウン『ダ・ヴィンチ・コード』

「ヨーロッパを舞台に主人公のハーヴァード大学教授ロバート・ラングドンが難解な殺人事件を豊富な知識を用いて解決していく小説」。主人公は宗教象徴学が専門であるが、宗教史学者や美術史に精通する人物も登場し、事件を推理する過程で様々な知識を披露する。「著者はダ・ヴィンチの美術作品などに様々な暗号を隠しており、読者が推理せずにはいられない展開となっている。」さらに、「アナグラムを用いなければ解読できない暗号になって」おり、それを解くためには多くの知識が必要。「読者にはぜひ一度読むことを止め、暗号解読に挑戦してほしい。」この本は、「物語を楽しみながら」、「美術史や西洋史の豊富な知識」が得られる。

## アーサー・コナン・ドイル「探偵ホームズ」シリーズ

物語の展開が早く、飽きることがない。一話一話に「すぐに読み切ってしまうほどのおもしろさがある。」「私が一番おもしろいと感じるのは、解決編でのホームズとワトソン、二人の登場人物の掛け合いである。』『まだらの紐』など短編集も数多く揃っていて、『恐怖の谷』などの長編もある。「空いた時間に合わせて」「長編・短編と読み分けられる」。

## (4)文学史上の作家(4タイトル)

多くの推薦文を読んでいるさなか、懐かしい顔に出会ったような気に、時々させてくれる。小説以外にも含めて紹介する。

太宰治「貧の意地」(\*、「新釈諸国噺」中の一編)、坂口安吾『墮落論』(\*)、石川啄木『一握の砂』(\*)、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』(\*)

※このうち日本作家の三作品は「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)で読むこともできる。

## 太宰治「貧の意地」

時は江戸時代。「原田内助は武士ではあるが、剣は駄目だし学においても書を広

---

げればすぐ寝てしまう有り様。その上気弱で情に厚く、それゆえ人に騙されるといった具合である。」そんな駄目男で貧しい生活を送る主人公、せっかく親戚が用立ててくれた十枚の小判を恐がり、『「このまま使っては、果報負けがして、わしは死ぬかもしれない』』と、同じ貧乏な仲間を集めて酒をふるまう。「自ら得たお金を他人と喜びを分かち合うために使っている」ところに感心する。その酒の席で小判が一枚無くなる。ところが、大騒ぎの中でひょいと小判が見つかり、さらに、もう一枚を女房が台所で見つけた。最初一枚は仲間の厚意に違いないが誰も申し出ない。原田もこの十一枚の小判をどうしても取めようとしない。「この部分では駄目男とはいえ、武士としての性根が確かに感じられる。」物語は窮余の一策、原田の思いつきでめでたく結末を迎える。資本主義社会に生きる現代人の利益傾倒的な考え方に対し、「今は無き武士の心意気を垣間見ることのできる短編小説である。」

**坂口安吾『墮落論』** ※これはエッセイ。

人はいかに考えを曲げて墮落しやすいものであるか、さらに、法律や規則で規制したところで人の墮落を止めることはできない。人は誰しもが墮落するものであるが、墮落しきることによって結果的に自分を救済する術を発見する。「この本は決して墮落することを推奨する本ではない」。「技大生が勉強や研究、そしてその他のありとあらゆることで挫折を経験し墮落していても明朗な人生を謳歌するための発想が述べられている」。「負のイメージしかない墮落をここまで前向きに捉えた本はないはずである。」

**石川啄木『一握の砂』** ※これは歌集。

石川啄木の日常が淡々と詠まれる。この歌集には暗い歌が多い。「事実、彼は父親の失業を機に家族全員を養わなくてはいけなくなり、天才と呼ばれた石川啄木が生きるためにどれだけ必死だったのかが痛いほど伝わってくる。」しかし、「苦勞を詠った歌だけではなく、非常に前向きな歌もある。」「高きより飛びおりるとき心もて この一生を 終るすべなきか」という歌は「高い所から飛び下りる

---

くらの心意気で一生を終わらせるにはどうしたら良いだろう、と考えている様子がうかがえる。」「一瞬の危うさの中にも前を見据えて生きていこうという石川啄木の力強い意志を感じることができる。」「『一握の砂』を読んでいると、どんなに辛い逆境の中でも自分は絶対に負けない、という気持ちになってくる。」

エミリー・ブロンテ『嵐が丘』 ※本書の推薦文は、この文章の最後に回したい。

#### (5) 少年少女向け文学 (4タイトル、1シリーズ)

大人が読んでも十分に面白い作品がたくさんある。

宮沢賢治『注文の多い料理店』(\*)、サン・テグジュペリ『星の王子さま』(\*)、ファビアーニ『黒い手と金の心』(\*)、ミヒャエル・エンデ『モモ』(\*)、J・K・ローリング「ハリー・ポッター」シリーズ(99.12-08.7、ポケットサイズ版あり)

#### 宮沢賢治『注文の多い料理店』

「童話の短編集なので、難しい話や長い本を読むのが苦手な人でもとても読みやすい」。表題作の内容は、「普段は狩りをしている2人の青年が食事をするために『西洋料理店』に入るが、そこは西洋料理を食べるお店ではなく、入った人を気付かないように食材として下ごしらえさせ、西洋料理として食べてしまう」店だったという「とても恐い話」。「活字離れといわれている我々の世代の人達が読書をするための入門編として適当な本」。

#### サン・テグジュペリ『星の王子さま』

私が一番に残った真理は花とキツネ。「『きみたちは美しい。でも外見だけで、中身はからっぽだね。きみたちのためには死ねない。もちろんボクのバラだって、通りすがりの人が見れば、きみたちと同じだと思うだろう。』」たくさんのバラの花はすべて同じ顔をしているが、愛してしまったなら、この世で一輪だけの、か

---

けがえのない花になってしまう。「『だって彼女はボクのバラだもの。』」男女の愛について考えさせられる花のお話は「子供の頃にはわからなかったことだ。」「キツネは言った。『大切なことは目に見えない。』と。」「大人になって忘れてしまった純粋な気持ちを思い出してほしい」。

### ファビアーニ『黒い手と金の心』

イタリアがオーストリアの占領下に苦しんでいた時代の物語。1848年のイタリア、ミラノ市での独立革命が舞台となっている。生活のために煙突掃除屋となって、仕事をしながらミラノへ向かう主人公。その主人公の率直な言動が物語の重大な要因として機能し、「心の素直さがどのように人に影響を与えるかを教えてくれる。」物語の後半では、ミラノでのオーストリアの弾圧や民衆が蜂起するまでの苦労が描かれている。主人公は、初め祖国が占領下にあることさえ知らないているが、この頃には、祖国をオーストリアから奪還するために仲間と協力して蜂起の準備をしている。戦争になっても主人公の素直な心が変わることはない。「どんな状況に陥っても変わらない心」の大切さ。ほかにも、「占領下における民衆の心情など、私たちが体験することがない様々なことを考える材料を与えてくれる。」

### ミヒャエル・エンデ『モモ』

時間泥棒から時間を取り返してくれた女の子の、不思議な物語。いつも時間に追われている技大生がもう一度時間について考えるきっかけを得ることができるだろう。

J・K・ローリング「ハリー・ポッター」シリーズ ※今回は次の二巻があがった。

### 『ハリー・ポッターと死の秘宝』

第1巻の発売から10年、第7巻まであるシリーズの完結編。強大な闇の魔法使いヴェルデモードとハリーたちとの壮絶な最終決戦が繰り広げられる。「手に汗握る展開が魅力だ。」また、「魔法学校で起こる数々の事件を通じて、ロンやハーマ

---

イオニーたちと友情を深めてきたハリー、その絆の強さ」。「最終巻では、今まで隠されていた伏線が次々と明らかにされていく。それらを理解した上でもう一度最初から読み返してみると少し違った楽しみ方があるだろう。」「世界中で子どもだけでなく、大人にも親しまれてきたハリー・ポッターシリーズ。その結末をぜひその目で見てもらいたい。」

### 『ハリー・ポッターと賢者の石』

「この作品は、驚くほど描写が細かく、時には生々しい描写で読み手の想像力をかきたてる。」「序盤のハリーの悲惨な生活環境から魔法界での生活ぶり、不思議な道具達など、挿し絵はほとんどないが、とてもイメージしやすく描かれていて、いろいろ楽しく想像できる。」「それから、伏線の上手さと、意外な展開にはうならされる。」この第1巻では「伏線だけがさりりと書かれているようなこともあり、次巻への期待が膨らんでいく。」また、「各キャラクターがとにかく濃くて、曲者が多いのも楽しさの要因の一つだと思う。」「これらの効果によって読み手を飽きさせず、400ページを超える量にもかかわらず一気に読み進めてしまう。」

### (6)ライトノベル (3タイトル、2シリーズ)、ノベライズ (1タイトル、1シリーズ)

近年、推薦文でもこの両ジャンルをみかけるようになってきた。最初から文庫として刊行された作品は (\* 刊行年月) と表示した。

小野不由美『凶南の翼』 (\* 96.2)、支倉凍砂『狼と香辛料』 (\* 06.2)、野村美月「文学少女」シリーズ (\* 06.5-)、古戸マチコ『やおろず』 (07.12)、有川浩「図書館戦争」シリーズ (06.3-07.11。第一作が『図書館戦争』) 夏原武『小説クロサギ』 (\* 08.2)、竜騎士07「ひぐらしのなく頃に」シリーズ (07.8)

### 小野不由美『凶南の翼』

「若干十二歳の主人公が様々な経験をして王になるまでを描いた活劇小説である。」彼女は「大人でも困難だと言われることに挑戦し、悩み苦しみながらもあき

---

らめない」。その姿は読者の共感を呼ぶ。この本はシリーズものの番外編で、「このシリーズは「同じ世界」という共通の枠組があるものの、作品ごとに主人公が異なり、自分の好きな物語を選ぶことができる」。本文には会話文が多く含まれ、テンポよく読み進めることができるので、本に苦手意識を持っている人でも読みやすい。「技大生が小説の面白さに気づき、小説を継続的に読むきっかけとなると考える」。

### 支倉凍砂『狼と香辛料』

「行商人ロレンスと賢狼の少女ホロの旅を綴った長編ファンタジー。」多くの伏線が張られ、物語の展開を予測する楽しみがある。伏線はすべて結末につながっており、「読んだ後に誰もが『なるほど、そういうことだったのか』と感嘆するほどまとまっている。」また、ロレンスとホロが会話の主導権をめぐって駆け引きのようなやりとりをする。最後はいつも、ロレンスがホロに丸め込まれてしまうが、それでもロレンスは、諦めずに何度も挑んでいる。この二人の会話に重要な伏線が張られていることもあり、非常に面白い。難しい表現はなく、情景をイメージしやすい。「文学に触れたことのない人にも読みやすく書かれている。」

### 野村美月「文学少女」シリーズ

事件を日本文学や西洋文学になぞらえて解決してゆく推理もので、文庫本で八冊発売されている。例えば、『“文学少女”と死にたがりの道化（ピエロ）』は冒頭の書き出しが「恥の多い生涯を送って来ました」。これは太宰治の「人間失格」からの引用である。本を読むのが好きな文芸部長のヒロインと、その部員である主人公が登場。ある日、その二人のもとに一通の手紙が届く。その内容が「人間失格」に酷似していた。実は、太宰治は「人間失格」執筆後に自殺した。そのことに気づいた二人は差出人を探そうとするが見つからない。手紙は二人のもとに届き続け、「人間失格」の内容は進み続ける。そして、「やっとの思いで見つけた差出人を知った時、二人は嘆きの物語を知る」。このように、物語が日本文学や西洋文学によって進行する。ほかにも、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」やガストン・ルー

---

「オペラ座の怪人」など。「日本文学や西洋文学に興味を持って、読むことに抵抗がなくなるだろう。私はこの本を読み終えた後に物語中に登場する本を何冊か読んだ。」文章量がそれほど多くなく表紙や挿絵にアニメ調のイラストを多用しているのでマンガ感覚で読むことができる。また、2、3時間で読み終えるので、「気軽に読み始めることができる。」

### 古戸マチコ『やおろず』

ネット小説、つまりインターネット上で公開していた小説を大幅に加筆・修正し、出版した作品。神様を題材としたライトノベルで、いくつかの短編で構成されている。「日本は昔、どんなものにも神は存在すると考えられ、それらは『八百万（やおろず）の神々』と呼ばれるほど親しまれていた。この本でも、家を守る家神から便所の神、忌み神などたくさんの神が登場している。」「ただし、それらの神々は主人公である女の子からみた姿であるといった設定である。」例えば、「忌み神なのにガテン系の大工おやじに見えたり、節分に出てくる鬼が疲れた中年のサラリーマンに見えるなど」。でも、神様の役割自体は、著者が調べ、解釈したことが書かれている。この本を読むと、「あまりなじみのない日本の神様を理解し」、「身近に感じることができるだろう。」途中でイラストもはさんであり、気軽に読むことができる。

### 有川浩「図書館戦争」シリーズ

図書館戦争、内乱、危機、革命の全四部からなる。この架空の日本では「メディア良化法」が施行され、検閲が認められている。例えば、「床屋」という言葉が差別用語として規制されるのだが、「床屋」という職業に誇りを持っている職人が「理髪店」などに言い換えられたことに怒りを表す。「その言葉を使わないことで差別がなくなるのか」、「結局、言葉を使う方の品性の問題では無いのか」、「実際の日本と比較しても、メディアにタブー視されている事柄があったりと、考えさせられることは多い。」また、不当な検閲から本を守ろうとする図書館隊と良化委員が検閲対象を巡って武装して戦う。一方、話し合いでの解決を支持する人もい

---

て、「違う立場での食い違いや葛藤なども良く描かれている。」でも、「やはりこの本はラブコメディ」で、決して重たくなならない。「男女比も技大と似ている図書館隊」には、技大生として共感することも多い。「表現の自由や戦争について考える」だけでなく、「楽しく読むことができる。」

### 夏原武『小説クロサギ』

※漫画『クロサギ』がドラマ化・映画化され、さらに漫画原案者によって小説化（ノベライズ）された。

「詐欺師を騙す詐欺師クロサギこと黒崎が、贈答詐欺と倒産詐欺に挑む、戦慄の詐欺サスペンスである。」本書は、詐欺師が一般人に贈答詐欺を仕掛けるところから始まる。初対面なので相手を全く信用していない一般人が、詐欺師の巧みな言葉使いにより徐々に気を許し、次に会う約束をしてしまう。そして、何回か会ううちに完全に相手を信用してしまい、あっさり詐欺に引っかかってしまう。「この一般人の心理状態の変化がリアルであるため、読者は思わず自分と重ね合わせてしまう。」また、詐欺師が相手をだます方法や手順が細かく記述されているので、読者の知的好奇心を満たしてくれ、詐欺の知識も得られる。さらに、詐欺師がクロサギこと黒崎を詐欺にかけようとする場面では、相手をだまそうとする詐欺師の心理が深いところまで分かる。だから、この小説からは「読者が詐欺の被害に遭わないための知恵」も学べる。

### 竜騎士07「ひぐらしのなく頃に」シリーズ

人気PCゲーム（同人ゲーム）のノベル版で、アニメ化、映画化もされているミステリー。小さな山村の日常と、そこで起こる祟りにどう立ち向かっていくかを描いた長編で、現在も最新作が順次発売されている。シリーズ各編ごとに事件の結末が異なり、また各編を順番に読み進めていくことで徐々に事件の真相が見えてくることもある。例えば、「鬼隠し編」で出てきた「監督」という言葉がここでは殺されたダム工事現場の「監督」だと思ったのに、「祟殺し編」で実は少年野

---

球チームの「監督」だったと分かる。また、シリーズの問題編で伏線を見つけ、解答編でその伏線を回収してゆくという形をとっているため、次の巻も読みたくなる。「本を読むのが苦手な人でも読みやすい。」

#### (7)ノンフィクション・エッセイ

このジャンルの本も毎年たくさんあがってくるのだが、今回は推薦文が私の印象に残った4冊を紹介する。

ヘンリー・クーパー Jr. 『アポロ13号奇跡の生還』(94.6、\*)、サイモン・シン 『フェルマーの最終定理』(00.1、\*)、島田洋七 『佐賀のがばいばあちゃん』(01.7、\*)、白石昌則 『生協の白石さん』(05.11)

#### ヘンリー・クーパー Jr. 『アポロ13号奇跡の生還』

アポロ13号は月の手前で船体にトラブルを起こし、一瞬で危機的な状況に陥ってしまった。当初予定されていた月面着陸は中止。地球に無事帰還するにはどうすればよいのか、次々と発生するトラブルに対し、3人の乗組員とNASAの管制官達は意見をぶつけ合う。管制官達が意見をまとめ、様々なシミュレーションを行って一番良い解決法をアポロ13号に伝えるという形で、彼らは次々と困難を乗り越えていった。このような努力により、アポロ13号は地球に無事帰還することができた。本書は、この帰還までの息詰まる過程を忠実に描き出している。トラブルの解決法を模索する乗組員や管制官達の会話が多く書かれていることによって、様々な意見からどのように解決法が導かれていったのかもわかる。「危機的状況の解決法の見本として読んでみると、とても参考になると思う。」

#### サイモン・シン 『フェルマーの最終定理』

証明するのに約360年もの年月を要したフェルマーの最終定理がどのように証明されていったのかを描いたノンフィクション。ピタゴラスの定理に始まりワイルズに証明されるまでの流れを詳細に記している。その内容は数学者同士の情報の

---

やりとりや研究成果など。これは、「数学にも歴史が存在し、様々な数学者の人間模様が存在する中で公式などが証明されてきたということを示している。そのような歴史や人間模様を知ること、数学の考え方がより明確に理解できるようになる。」また、数学者と物理学者の考え方の違いを知ることができる。例えば、ある規則に従ってチェス盤のマスを全て埋め尽くすことができるかどうかを証明する問題。物理学者は実験的に全通りの方法を試し、その結果を成果とする。これに対し、数学者は論理的に証明しようとする。さらに、この本にはいくつかの証明問題が載っていて、数学の基本的な公式を学ぶことができる。「数学の勉強にも役立つ。」

#### 島田洋七『佐賀のがばいばあちゃん』

昭和33年、広島から佐賀の田舎に預けられた八歳の昭広と、厳しい戦後を七人の子供を抱えて生き抜いた祖母との貧乏生活が語られるエッセイ。がばいばあちゃんは、家の裏にある川が「我が家のスーパーマーケットばい」と胸を張る。川上の市場から捨てられて流れてくる形の悪い野菜が川に渡してある棒に引っかかる、それを拾って食べているからである。「形が悪くても味や品質には無関係」なのに、「現代でもスーパーに見た目の悪い商品が並んでいることはない。」「がばいばあちゃんの節約術」は「現代人の日常生活を見直すきっかけをくれる」。また、がばいばあちゃんを始め、家族や近所の人々、昭広の学校の先生や友達などたくさんの登場人物たちが、皆、人を思いやる気持ちを持っていて、「温かな気持ちになることができる。」この本は、がばいばあちゃんが本当の“幸せ”について教えてくれる、「笑いあり、涙ありの感動作である。」

#### 白石昌則『生協の白石さん』 ※ジャンル分けが難しい。ここで紹介する。

東京農工大学の生協職員である「白石さん」がひとことカードに寄せられた質問・要望に返答したものを集めた本。例えば、「単位がほしいです」には、「そうですか、単位、ほしいですか。私は、単車がほしいです。お互い、頑張りましょう!」。「普通であれば返答などされないと思えるものに、少しのユーモアを交ぜ

---

て真面目に返答してある。「こんなやりとりに私は微笑ましくもなり、どこことなくホットしたのを感じた。」「質問を寄せているのは大学生なので、共感できる場所も多くあった。」しかし、ユーモアだけでなく、心に響くものもある。「もういやだ死にたい」には、「生協という字は『生きる』と『協力する』(中略)生き続けて、見返しましょう!」とある。「ふざけているような内容の中にも、こうした真摯なメッセージが込められている」。この本は「一ページに質問と返答があるだけで」、「どこのページから読んでも大丈夫」。読みやすい本である。

※ では最後に、本にはこんな読み方もある。

### エミリー・ブロンテ『嵐が丘』

「この本は主人公であるヒースクリフの復讐劇である。」

「一人の男が嵐が丘にある屋敷を訪れ、そこで長年勤める家政婦のエリーから館の主人のヒースクリフにまつわる話を聞く」。この館の前の主人が孤児であったヒースクリフを家に連れて帰った。ヒースクリフは主人とその娘キャシーからは良くされるが、その他の家族からはひどい虐待を受けていた。キャシーとヒースクリフは成長し、愛し合うようになる。だが、キャシーは他の裕福な男と結婚してしまい、ヒースクリフは家を出て行く。時が経ち、ヒースクリフは自分を傷つけたキャシーや家族に復讐するために帰ってくる。しかし、その後すぐにキャシーは死んでしまう。このことが原因でヒースクリフは精神が壊れてしまうが、ヒースクリフの復讐は終わらず、物語は続いていく。

「私はこの本を読んでいる時、どの登場人物にも感情移入できなかった。」「しかし、この本は読み終わった後、時間が経つごとにゆっくりと面白くなっていった。」「この本を読む前、私は自分が本の中に入り物語を登場人物たちと楽しむといった本の読み方をしていた。」だが、「自分には理解できない感情をわかってほしいとせず、」「外からこの物語を眺め、自分の今までの経験や思考と比較することで面白さが出てきた」のである。

「この本に私は本の別の見方を教えてもらった。」

以上で紹介を終わる。

さて、「技大生がすすめる一冊の本」、数えてみるとここで紹介したのは全部で43タイトル・7シリーズ。これらのうちのどの一冊でもいいから、興味を惹かれたものがあつたら皆さんは手に取って見たらよい。もしかしたら、それが、そのあとあなたの何かにつながっていくかもしれない。

最後に、学生の推薦文の摘記・要約は、表記や文章を整え、その主旨に合うように表現を変え、あるいは補い、主旨を損なわない範囲で再構成している。また、複数名の推薦のあつた作品については、それらの推薦文を一つにまとめた。

この文章の内容には正確を期したが、調べが行き届かなかった所があるかもしれない。文責はすべて私（若林）にある。

## 掲載図書紹介

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『聖女の救済』 東野圭吾著 文藝春秋 2008年 1,699円

『流星の絆』 東野圭吾著 講談社 2008年 1,785円

『ある閉ざされた雪の山荘で』 東野圭吾著 講談社文庫 1996年 559円

『風が強く吹いている』 三浦しをん著 新潮社 2006年 1,890円

『赤朽葉家の伝説』 桜庭一樹著 東京創元社 2006年 1,785円

『ゴールドスランバー』 伊坂幸太郎著 新潮社 2007年 1,680円

『グラスホッパー』 伊坂幸太郎著 角川文庫 2007年 619円

『新世界より』 貴志祐介著 講談社 2008年 3,990円

『光の帝国』 恩田陸著 集英社文庫 2000年 519円

『いま、会いにゆきます』 市川拓司著 小学館文庫 2007年 599円

『電車男』 中野独人著 新潮文庫 2007年 579円

『カレーライフ』 竹内真著 集英社文庫 2005年 1,200円

- 
- 『博士の愛した数式』小川洋子著 新潮文庫 2005年 459円  
『半島を出よ』村上龍著 幻冬舎文庫 2007年 1,560円  
『大地の子』全4巻 山崎豊子著 文春文庫 1994-1995年 2,440円  
『三たびの海峡』帯木蓬生著 新潮文庫 1995年 660円  
『光る壁画』吉村昭著 新潮文庫 1984年 499円  
『コーヒー党奇談』阿刀田高著 講談社文庫 2004年 599円  
『夜のかくれんぼ』星新一著 新潮文庫 1985年 499円  
『スカイ・クロラ』森博嗣著 中公文庫 2004年 619円  
『銀河英雄伝説』全10巻 田中芳樹著 創元SF文庫 2007-2008年 8,337円  
『双頭の悪魔』有栖川有栖著 創元推理文庫 1999年 1,092円  
『幽霊人命救助隊』高野和明著 文春文庫 2007年 720円  
『神様のパズル』機本伸司著 ハルキ文庫 2006年 714円  
『千里眼』シリーズ 松岡圭祐著 角川文庫 2007年-  
『厭魅(まじもの)の如き憑くもの』三津田信三著 原書房 2006年 1,995円  
『QED～ventus～御霊将門』高田崇史著 講談社 2006年 882円  
『ダ・ヴィンチ・コード』上・中・下巻 ダン・ブラウン著(越前敏弥) 角川文庫 2006年 1,737円  
『新訳シャーロック・ホームズ全集』全9巻 アーサー・コナン・ドイル著(日暮雅通) 光文社文庫 2006-2008年 6,356円  
『お伽草子・新釈諸国噺』太宰治著 岩波文庫 2004年 735円  
『墮落論』坂口安吾著 岩波文庫 2008年 735円  
『一握の砂』石川啄木著 朝日文庫 2008年 546円  
『嵐が丘』上・下巻 エミリー・ブロンテ著(河島弘美) 岩波文庫 2004年 1,281円  
『注文の多い料理店』宮沢賢治著 集英社文庫 1997年 439円  
『星の王子さま』サン・テグジュペリ著(倉橋由美子) 宝島社文庫 2006年 499円  
『黒い手と金の心』ファビアーニ著(杉浦明平) 岩波少年文庫復刻版 1992年

---

品切・絶版

『モモ』 ミヒャエル・エンデ著（大島かおり） 岩波少年文庫 2005年 840円

『ハリー・ポッターと死の秘宝』上・下巻 J・K・ローリング著（松岡佑子）  
静山社 2008年 3,990円

『ハリー・ポッターと賢者の石（携帯版）』 J・K・ローリング著（松岡佑子）  
静山社 2003年 997円

『凶南の翼』小野不由美著 講談社文庫 2001年 729円

「狼と香辛料」シリーズ 支倉凍砂著 電撃文庫 2006年-

「文学少女」シリーズ 野村美月 ファミ通文庫 2006年-

『やおろず』古戸マチコ著 イースト・プレス 2007年 1,050円

「図書館戦争」シリーズ 有川浩著 アスキー・メディアワークス 2006年-  
6,720円

『小説クロサギ』夏原武著 小学館文庫 2008年 479円

「ひぐらしのなく頃に」シリーズ 竜騎士07著 講談社Box 2007年-

『アポロ13号奇跡の生還』ヘンリー・クーパーJr.著（立花隆） 新潮文庫  
1998年 品切・絶版

『フェルマーの最終定理』サイモン・シン著（青木薫） 新潮文庫 2006年 820円

『佐賀のがばいばあちゃん』島田洋七著 徳間文庫 2004年 539円

『生協の白石さん』白石昌則著 講談社 2005年 1,000円

ブックガイド目次へ